

保育者養成に活かす童話作成とコンボイ・モデル

大須賀 隆子

（帝京科学大学こども学部こども学科）

【目的】

子どもに安心安全感を与え、遊びや生活を共に楽しみながら援助できる保育者に成長していくには、どのような養成支援が必要なのだろうか。筆者は、2008年より保育者養成課程の学生と共に創作童話の作成に取り組んでいる。童話作成（蘭,2008）は、A4画用紙4枚に描画（クレヨン）と文章によって、動物を主人公にした起承転結のある物語を創る取り組みである。それによって学生が自分のなかの「こども性」を保ち続けるとともに、主体感覚と創造力を育み、学生の自己理解と筆者の学生理解を深める契機とすることをねらいとしている。学生理解の補助として、愛着対象者の多寡と適応の視点から「コンボイ・モデル」（Kahn&Antonucci,1980）を取り入れている。童話作成とコンボイ・モデルを通して、筆者はどのように学生理解を深める契機を得ているのだろうか。それは、どのような保育者養成支援につながっていくのだろうか。

【方法】

【対象者】4年制保育者養成課程1年生男子20名、2年制保育者養成課程女子1年生15名。【童話作成とコンボイ・モデルの実施時期】男子は保育実習後の1年次6月、女子は幼稚園教育実習後の1年次1月。【気がかりな学生の童話作成とコンボイ・モデルを通じた面接時期】男子は1年次6月～10月、女子は1年次1月末。//童話を通じた学生理解の分析項目と手順 ①男子20名と女子15名の童話について、《主人公の特徴と変化》《主人公と脇役の関係性》《背景の描き方》《テーマ》《体験様式、体験様式とは、被動感、受動感、主動感、能動感（蘭,2008）》の各項目にわたって分析し、全体的傾向を捉える。②気がかりな学生の、童話とコンボイ・モデルに基づいた面接を通じた事例を検討する。

【結果と考察】

主人公と脇役の関係性は、「協調的」が女子群では60%、男子群20%。脇役人数1人の童話が、女子群では40%、男子群では45%。脇役人数1人とは2者関係の物語であり、学生の人間関係力の脆弱性と閉塞性を反映しているのかもしれない。

保育者とは、自分自身が主体感覚をもつと同時に、子どもと状況を抱えながら、子どもを引っばるのではなく、子どもの主体性を育てるようなケアワーカーのことである。つまり、「体験様式」で言えば、「能動感」ではなく、「主動感」をもって生活していることが求められる。その視点から、1年次の男女とも「受動感」で童話を作成している者が40%もいるという結果（理解）を踏まえての今後の養成が求められる。

気がかりな学生の事例検討では、「被動感（主人公が状況に流されたり、強い不可抗力に支配される体験様式）」で童話を作成した学生のコンボイ・モデルには、愛着対象者の乏しさが示された。童話作成後に、面接のなかで学生自身が作成した童話について語ることを通して、共感されたり質問されたりするなかで、自分自身のあり方に気づく過程を重ねることが変容への契機であるように思われる。